

二〇二四年四月 総評 立花開

視神経の星座に連なる青絵具

桜望子 山形県

張り巡らされた視神経が星のよう。それを繋げて星座にするらしい。見えていなくても、星座の気配が体の中にある。その星座をなぞるように染め上げる青絵具は主体の何らかの部分になぞられた跡。主体の気配が濃くなっていく。

さんずいの

ように

途切れたちんもくへ

きみは母音のといきをもらす

さいう 石川県

沈黙といえど停滞して動かないものと思ったが、水のように流れ続けるゆえにどこにも手が届かず流れ続けるしかない。そこに石を落とすようにため息をもらす「きみ」。けれど一つだけ救いと思えるのが、柔らかな母音を象っているということ。

知りたくば命を削れ蝶生まる

小林紅石 埼玉県

何も失わずして、得ることはできない。「削れ」という命令形はなくなることにはかり目がいつてしまいそうになるけれど、その底にそれでも生きろという強い思いが滲む。命を削りながら生き、新たな命が生まれるのを見つめる。交差する命の一点。

春の泥鼻血と雑ざるゴーリー忌

(2000 年 4 月 15 日没)

田崎森太 東京都

アメリカの絵本作家のエドワード・ジョン・ゴーリーの忌命日。暴力によって流れた血はなぜ鮮やかなのか。けれど、春泥とゆっくりと混ざり合っている、血の輪郭が淡く消えていく。消えていくのは、輪郭だけではないだろう。

日向夏きゆるきゆる剥いて

食べないと死んじゃう生き物系

わたしたち

香取小春 宮崎県

剥く音の可愛らしさ。日向夏のお厚い皮を剥いたとき、中から現れる鮮やかな黄色。ポップな系統にカテゴライズされているが、食があるかぎり死を感じ続けるしかないのだと思われる。

真鍮の葉

窓から射し込んで

わたし

わたしの続きのわたし

永山 逢海 神奈川県

今が次の瞬間には過去になる、人生はその繰り返し。戻れない場所にばかり人は心を割いてしまうけれど、主体は明るさを感じる。新緑を、それを透かした日光を美しいと感じる自分を過去に見送り、その続きを生きる。

「さよなら」で

割れたくす玉みたいだね

この世の果ての団地の桜

高松 瞳 東京都

くす玉が割れた瞬間の紙吹雪は、生への祝福のようだ、と思う。たとえ中身が「さよなら」であったとしても。でもこの世の果てにあるのが団地というのは何だか怪しい。けれど、そういう場だからこそ桜は美しさを増す。

泣かなくていい夜

ナタデココ出ない

汐見りら 東京都

泣かなくていい夜ではなく、泣くところまで心が追いつかない夜なのだと思う。噛む度に甘さが滲み出る、独特な食感のナタデココ。ナタデココは、感情に似ている。感情は、噛みしめて味わって飲み下して、初めて自分のものになる。それができない夜。

顔にモザイクをかけることは

愛です 静かな朝焼けの

浪花 小槇 東京都

これは、本当に愛なのだろうか？対象への愛ではなく、自分に向かう愛ではないかと思う。生理的な部分で受け止められないものが見た目にあるのに、自分でも認めない。愛だと言いたい張ることは、ひとつの暴力。

秋の灯の声から悲しみがうつる

福山ろか 埼玉県

人間の感情で最もうつりやすいのは、悲しみではないだろうか。秋の灯が照らす部分を声が通って、悲しみが照らし出された。光のもとに晒された悲しみは細部まで見えてしまい、見たくないところまで見えてしまう。それ故により深く悲しみが心に差し込まれる。